

特集

学年末を締めくくる

今年度も残りわずかとなりました。一年のまとめとなるこの時期に、これまでの国語学習で学んだことを振り返らせ、その力がこれからの国語学習に生かせるということを、子ども自身に気づかせたいものです。

本特集では、学年末の締めくくり方について、松永立志先生（前鎌倉女子大学准教授）にご提言いただきます。そして、三名の先生方による実際の指導方法をご紹介します。

提言

学年末をどのように締めくくるか —児童の「言語活動履歴」を活用しよう—

前鎌倉女子大学准教授 松永立志

体育科の指導に学ぶ

体育科の学習において、子どもたちは、自分の運動技能をよく知っています。知っているがゆえに、次のような場面を見ることができません。

- 共通のめあてを聞いて、自分自身のめあてをもつことができる。
- そのめあてについて、次の学習につながる振り返りを行うことができる。
- 自分の技能に合った道具や方法を選択することができる。
- 技能の高まりや、できるようになった喜びを自覚することができる。
- 技能を互いに教え合ったり学び合ったりすることができる。

振り返って、国語科の学習においては、どうでしょうか。子どもたちは、自分の言語技能をよく知っているでしょうか。学習

中に、前述した場面を見ることができませんでしょうか。

どんな力が身についたか

学年末を迎えるにあたって、子どもたちにどんな国語の力（特に言語技能）が身についたかは、教師として、誰しもが気になることです。そこで、これまでの学期ごとの評価を分析したり、ポートフォリオ評価を中心にした総括的な評価を行ったりしているのではないのでしょうか。

ここで大事なことは、教師が実態を把握するだけではなく、子ども自身が、自分はどうくらい国語の力がついたかということを意識しているかどうかです。学年末の振り返りは、次の学年における国語科の学習に意欲的に取り組めるかどうか、大きく関わってくるのです。

そこで、次の三点に取り組むことを提言したいと思います。

- ① 言語技能を意識させる学習の設定
- ② 子ども自身によるポートフォリオ評価
- ③ 学習習慣の振り返り

① 言語技能を意識させる学習の設定
まず一つ目は、学年末に行う最後の国語科の単元において、言語技能を意識せざるをえない学習を設定することです。どの領域でもいいのですが、はっきりと分かりやすいのは、「書くこと」の領域でしょう。例えば、六年生においては、小学校生活最後のまとめた文章を書く教材「随筆を書こう『忘れられない言葉』」です。時期的に、卒業アルバムや卒業文集制作に絡めて、読み手は、「十年後の自分」にします。社会人になった自分が、

小学生時代に書いた文章を読み返し、「意外に書けてるね」「けっこう大人びた文を書いてるなあ」などと評価してくれる文章を書くという目的意識をもたせます。その目的を達成するため、これまでに学習した文章構成の工夫、事実と感想・意見の書き分け、日常使わない語彙の使用など、書くことの技能を、十二分に発揮させます。特に、倒置法、体言止め、擬人法、比喩や反復、オノマトベ、問いかけなどのレトリックを、縦横無尽に使いながら、思い切り背伸びをして、自分との対話を文章化させます。この言語活動によって、子どもは、自分の言語技能をいやがうえにも意識することになります。

②子ども自身によるポートフォリオ評価

二つ目は、子ども自身がポートフォリオ評価を行うことです。ただ単に、一年間の学習の成果物を集めて振り返るだけでは、言語技能の習得を確かめるのには不十分です。その成果物を生み出すために使用したノートやワークシートが、添付されていないではありません。そして、そこには、自分が考えて書いた鉛筆の跡と、友達との学び合いや先生の指導助言の結果を書いた色鉛筆の跡が、ともに残っ

ていることが、自らの技能の成長を振り返るのに有効なのです。

さらに、重要なのは、形に残る物の他に、子どもの音声や録音・録画しておくことです。音読朗読、スピーチ、討論など、「話すこと・聞くこと」の学習の成果も、振り返ることができるようにしておくことが、技能の成長の確認につながります。

③学習習慣の振り返り

三つ目は、自分にどのような学習習慣が身についたかを、子ども自身が振り返ることです。漢字の書き取り、音読練習、読書や辞書引きの習慣、学習した言葉を自分の語彙表に書き加える習慣、簡単なメモだけでスピーチする習慣、誰かが発言したら何かしらの言葉で返す（対話する）習慣など、さまざまな学習の日常化によって、習慣化されたものがあるでしょう。学びの基盤となる習慣を、子ども自身が振り返り、自覚することが大切です。

「言語活動履歴」を引き継ぐ

現行の国語科学習指導要領においては「言語活動を通して指導事項を指導する」ということが重視されています。そのた

め、言語活動を基盤においた国語科の単元を構想する必然があります。

そこで、学年末を迎えるにあたり、一年間の国語科の各単元において、どんな言語活動を設定し、その結果はどうであったかを把握します。学年の変わり目には、新担任は前担任から、各児童について、その学習の状況や性格行動の特性、健康の状態、家庭環境などの引き継ぎが行われます。その際、「言語活動履歴」も、併せて引き継ぐとよいでしょう。次のような内容について記録を行い、まとめておきます。

- ①単元名
- ②教材名
- ③実施した言語活動
- ④言語活動の実施状況
- ⑤言葉の力の定着状況

この履歴の取りまとめにあたっては、④⑤の評価を伴う項目も含まれるため、記録の取り方について、校内の教員間で共通理解を図ることが必要ですが、ある程度簡略化された方法でもよいので、まずは取りかかることが肝要です。

この言語活動履歴をしっかりと引き継ぐ

ことにより、新担任も、児童と同じ認識に立って、これからの学習を見通すことができることとなります。さらに、指導計画を作ったり単元構想をしたりしていく際に、「指導事項」と「教材」と「児童の言語活動の経験」と「児童の身につけている言葉の力の程度」に、それぞれしっかりとマッチングした言語活動を設定することができ

るのです。また、言語活動履歴を引き継ぐときに、その授業で使った模造紙などの掲示物、文集やパンフレットなどの成果物なども併せて引き継ぐようにしたいものです。空き教室や特別教室などの一角を借用して、国語科資料コーナーを整備し、そこで保管しておく、今後の授業に、有効に活用できるでしょう。

実践事例について

本特集では、三つの実践事例を紹介しています。低学年の事例は、低学年教材の特徴の一つである「繰り返し」に着目したものです。読む技術として焦点化することで、第二学年以降の教材の読みにも活用できたり、読書生活を豊かにできたりするという展望があります。

おわりに

「国語の勉強は楽しい」。このような子どもの言葉こそが、多くの教師が長年追い求めてきた国語科の授業改善のゴールです。しかし、「楽しさ」とは、ただ単におもしろいというものであってはなりま



鹿児島県生まれ。横浜市教育委員会指導主事、横浜市小学校校長、鎌倉女子大学教育学部教育学科准教授として勤務。小学校学習指導要領解説国語編（平成11年、20年）作成協力者を務める。光村図書小学校「国語」教科書編集委員。